



**Data**

監督・製作・脚本: クラウス・レーフレ

出演: マックス・マウフ/アリス・ドワイヤー/ルビー・O・フイー/アーロン・アルタス/フロリアン・ルーカス/アンドレアス・シュミット/ロベルト・フンガー=ビュラ

■□■ショートコメント■□■

◆ドイツでは「ヒトラーもの」の映画が毎年のように作られており、その最新は『ゲッベルスと私』(16年)だった。同作はゲッベルスの秘書をしていたブルンヒルデ・ポムゼルが103歳のときにインタビューに答えたドキュメンタリー映画で、当時のニュース映像を含む様々な映像がインタビューの間に挿入されていた。それに対して、本作は男女4人の「ヒトラーを欺いた黄色い星」の実話を、21世紀まで生き残った4人へのインタビューと、4人の若い俳優たちによるドラマで構成したものだ。

◆本作で、「ヒトラーを欺いた黄色い星」として登場するのは、公式ホームページによれば、次の4人の男女だ。

**ツィオマ・シェーンハウス**  
(男性/1942年に潜伏開始。当時20歳)

ベルリンで暮らしていたツィオマは当局から移送命令を受けたが、集合場所で担当官に「工場に戻れと言われていました」と咄嗟に嘘をつき、運よく収容所行きを免れた。両親と生き別れて独りぼっちになったツィオマは、出征を控えるドイツ人兵士に成りすまし、ベルリン市内の空室に寝泊まりすることに。危険な長居を避けて20軒ほどの空室を転々としたのち、親切な家主の女性にめぐり合い、身を落ち着かせることができた。

やがて器用な手先を生かしてユダヤ人向けの身分証の偽造を行っていたツィオマは、ユダヤ人を支援する中年男カウフマンから大量の偽造依頼を受注。さらに友人のルートヴィヒからひと目につかない作業場を紹介され、多くのユダヤ人の命を救うことができるこの闇仕事に没頭し、幼い頃からの夢だったボートを購入できるほどの報酬を得ていった。しかし不注意によるトラブルで指名手配されてしまい、新たな潜伏先に向かうことに。

## ルート・アレント

(女性／1942年に潜伏開始。当時20歳)

ユダヤ人はダンスホール入場が禁止されていたため、友人宅でレコードをかけて踊りを楽しんでいたルートは、ユダヤ人弾圧の激化によって潜伏を考え始める。ルートとその家族を最初に匿ったのは、医師であるルートの父親を娘の恩人として敬うキリスト教徒のゲール夫人だった。

いつ逮捕されるか絶え間ない不安のなか、ルートは友人のエレンとともに戦争未亡人を装って外出するようになる。やがて隠れ家を失ったふたりは凍てつく路頭をさまようが、ドイツ国防軍のヴェーレン大佐の邸宅でメイドの仕事を得た。連日、豪勢なパーティーを開くヴェーレン大佐は、ルートらがユダヤ人だと気づきながらも、なぜか掃除や子守の仕事を与えて守ってくれた。そしてベルリンへの空襲が激化するなか、家族のもとへ帰ろうとしたルートは、死体があちこちに散乱する市内中心部の惨状を目の当たりにする。

## オイゲン・フリーデ

(男性／1943年に潜伏開始。当時16歳)

母親の再婚相手がドイツ人だったため、オイゲンは家族の中で唯一、ユダヤ人と識別するための黄色い星のバッジを付けなくてはならなかった。両親と別れて潜伏するはめになったオイゲンは、共産主義者の一家に受け入れられ、その家の娘との淡い恋を経験する。しかし、その穏やかな日々は長く続かなかった。

郊外の活動家ヴィンクラーの家に引き取られたオイゲンは、周囲に怪しまれないようヒトラー青少年団の制服を与えられた。そんなある日、テレージエンシュタットの収容所から脱出してきた男ヴェルナーがヴィンクラー宅に身を寄せてきて、ユダヤ人虐殺の恐ろしい実態を打ち明ける。「皆殺しだ。翌日には全員死んでいる。ガスで殺すんだ!」。オイゲンはヴィンクラーやヴェルナーによる反ナチスのピラ作りを手伝うことに。やがてヴィンクラーらは密告によって逮捕され、屋根裏部屋に身を潜めることになったオイゲンのもとにはゲシュタポの手入れが迫ってくる。

## ハンニ・レヴィ

(女性／1943年に潜伏開始。当時17歳)

両親を亡くし、知り合いのユダヤ人一家と同居していた孤児のハンニは、ひとり収容所行きを免れて着の身着のまま家を出た。母の友人であるキリスト教徒のベルガー夫人を頼ったハンニは、ハンネローレ・ヴィンクラーという偽名を使い、美容院で髪を金色に染めて別人となる。こうしてユダヤ人としての素性を隠すことに成功するが、隠れ家を失って孤独の恐怖に苛まれることに。

そんなある日、ハンニは映画館で若い男性に声をかけられた。ハンニに好意を寄せるその男性は戦地行きを間近に控えており、映画館の窓口係をしている母親の話し相手になってほしいと頼んでくる。「私はユダヤ人で、逃げ場がないんです」。男性の母親に意を決してそう伝えると、その女性はハンニを自宅に匿ってくれた。やがてふたりは本当の母子のような絆を育むが、戦争の終わりが近づくなか、ベルリンに侵攻したソ連兵が彼女たちの前に現れる。

◆そもそも「黄色い星」が何を意味するかについて知っている日本人は少ないはず。私がある言葉の意味をはじめて知ったのは『黄色い星の子供たち』(10年)、『シネマ 27』118頁)を観たときだ。本作では、オイゲン・フリーデ(アロン・アルタラス)について、その「黄色い星」を巡る物語が登場するので、それに注目!

本作で私がはじめて知ってビックリしたのは、「7000人もユダヤ人が戦時下のベルリンに潜伏し、1500人が終戦まで生き延びた」という衝撃的な史実。そして、本作は前述した4人の男女がいかにして生き残ったのかを描く映画だ。もともと、それをインタビュー仕様とドラマ仕立てを併用して描くことの可否については賛否両論があり、私には違和感の方が強かったが、さて、あなたは?

◆本作を観ていると、一方では危険を犯してユダヤ人を匿ったドイツ人がたくさんいたことに驚かされる。その最たるものは、ドイツ国防軍のヴェーレン大佐。ナチスの高級将校がルートがユダヤ人だと知りながら、彼女に掃除や子守の仕事を与えて守ってくれたのは一体なぜ?一瞬ヘンな下心を持っていたためではないかと疑った私のゲス根性をしっかり恥じなければ……。

他方、ユダヤ人なのにユダヤ人をゲシュタポに売る(密告する)ユダヤ人がいたことはショックだったが、他方で、あんな極限的な状況下でも反ナチスのピラ作りを始めるユダヤ人がいたことにビックリ。現在、自民党の総裁選挙を巡っては、竹下派が安倍晋三、石破茂のどちらにつくのかについて迷っているらしい。そんな時こそ政治家一人一人の矜持や生き方が試されることになるが、人間はやはり信念をもって生きていかなくちゃ……。

2018(平成30)年8月9日記